

から告げられ、候補者らは「被告や被害者と関係がありませんか」といった質問が盛り込まれた質問票に記入した。

続いて、秋葉康弘裁判長が「予想した以上に多くの人が来ていただき、大変ありがたい」とあいさつ。質問票への回答内容から、「個別に事情を聞く必要がある」と判断した3人を、同じ2階の質問手続き室に招き入れ、検察官、弁護士の出席のもとで、口頭で質問。

このうち2人の辞退を認め、補充裁判員3人が決定。大型モニターに9人の番号が表示された。

傍聴希望2000人超す

この日は、全国初の裁判員裁判の法廷を見届けようと、一般傍聴席58席を求めて2382人が東京地裁前に長い列を作った。東京都世田谷区に住む私立大法学部3年長島実土さん(21)は「授業でやっている模擬裁判の参考にしたい」と、午前7時半頃、地裁に来た。弁護士を目指して年に20回程度、刑事裁判を傍聴しているといい、「裁判員制度が導入される前と後では、裁判がどう変わるのか、自分の目で確かめたい」と話した。

覚めた。抽選結果が大型モニター画面に映し出された瞬間は、「みな息をのんでいた。緊張のあまり涙が出そうになった」と話した。

「反対」団体が声明

裁判員制度に反対する弁護士や学者、市民らでつくる「裁判員制度はいらない！大運動」(事務局・東京)は、3日午前11時から東京・霞が関の弁護士会館で記者会見した。

「選ばれず拍子抜け」「裁判身近に感じた」

■候補者たち

11時15分に手続きが終了。裁判員に選ばれなかった候補者らが待合室を出てきた。

記者会見に応じた葛飾区の専業主婦(36)は、「選ばれず、拍子抜けしました」と穏やかに話した。本当は辞退を希望するつもりだったが、「夫がせひ行って」と勧められたので、自

検察官・弁護人

分後に地裁入り。主任を務める町田鉄男検事(41)は「歴史的な転換点となる裁判を担当することになり、身が引き締まる思い。裁判員にとって分かりやすい立証活動を行うよう努めた」と抱負を述べた。

閉症の息子を預け、おかしうを作り置きして来た」という。「プロの法曹による検証が、一般の目から見て間違っていないかを確認すればいいと思った。自分が平穩に暮らしていることにありがたみを感じました」と、今回の経験をかみしめるように語った。

また、中野区の不動産業、土生雅祥さん(65)は「裁判が身近にあると感じたし、もう少し裁判に対して一般市民が注視しなくてはいけないという気持ちになった」と振り返った。中央区の製薬会社員島田達二さん(48)は、職場に6日まで公休を申請していたといい、「残念だったのと、ほっとした気持ちの半分半分」と話し、スーツ姿で会社に向

かった。

一方、会社員高木勇介さん(28)は、「とにかく寝坊しないようにと考えた。会社は休みをもらっているので、この後は帰って寝ます」と安心した様子。

金融会社に勤める女性(48)は、昨夜は緊張でよく眠れず、夜中に何度も目が

会見には、呼びかけ人でジャーナリストの斎藤貴男さんや高山俊吉弁護士らが出席。「国は、国民を納得させる制度導入の理由を一切説明していない」などとする声明文を読み上げた後、高山弁護士が「罰則を受けてでも参加したくないという国民が大勢いるにもかかわらず、制度の実施を延期しないのはおかしい」と語った。地裁前では、午前9時過ぎから、同団体が「裁判員制度は間違いです」と、通行人に拡声機で呼びかけながらビラ配りをした。